

GIGA スクール元年における令和の日本型学校教育の学びの創造！

第19代校長 藤崎 顕 孝

令和3年度当初人事異動により小林校長の後任として着任しました藤崎顕孝（ふじさき あきたか）です。どうぞよろしくお願ひいたします。わたしは、昭和60年4月、春日部東中学校の社会科教員として教職の道に入りました。以来、幸手西中・杉戸中・杉戸町教育委員会、教頭として越谷荻島小・久喜本町小、校長として幸手さかえ小・蓮田黒浜北小・行田下忍小に勤務してきました。来年度、わたしは定年を迎えるため、新郷第二小が教員生活最後の学校になります。初心にもどり、精一杯頑張っていきますのでどうぞよろしくお願ひします。

着任し、まず、いくつかの『なぜ?』を見つけました。その1つが歴代校長。なぜ明治11年の創立なのに「第19代」なのかということです。というのも、前任の下忍小は昭和33年4月の開校で22代目の校長でした。でも、これはすぐに解決。昭和28年4月に「新郷第二小」となつてからの歴代ということでした。そうすると新たな『なぜ』が出てきます。それ以前の校長先生は？創立からだと何代目？10月25日を開校記念日とした根拠は？羽生市は初めての勤務地でもあります。これから羽生市の歴史、新郷第二小の歴史を一つ一つ紐解いていきたいと考えています。

さて、表題についてです。昨年度は『2020教育改革元年』といわれ、新しい教育のスタートの年でした。しかし、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、臨時休校から始まり、学校再開後も新しい学校生活様式に基づき教育活動が様々な制限を受けました。子どもたちへの学習保証の観点から、当初、令和5年までに『3人に一台のタブレット配布』が計画されていましたが、GIGAスクール構想により、3年前倒しで一人一台端末・高速インターネット通信の環境が整備されました。また、現行の学習指導要領が告示された4年前は『予測困難な未来社会』という語が使われていましたが、昨年6月1日に文部科学省から発刊された『令和2年度版科学技術白書』には、2040年の未来予測図として右図が掲載されました。2040年といえば、今の小学生が社会人となり活躍している時期です。そして、令和3年3月30日の中央教育審議会答申「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す個別最適な学びと協働的な学びの実現～には、これからの授業における子どもたちの学びのイメージを下図のように具体的に示しました。

そのため、今年度からここに示された『学び』を実際の授業の中で具現していくことが全ての学校に求められる大きな課題となりました。新郷第二小では、これらの負託に応えるためにも「新郷第二小で学ばせてよかった」「新郷第二小で学んでよかった」という満足感ある教育活動の提供を指標とし、未来に生きる子どもたちの『夢』を育み、広げ、叶えるために、挑戦と創造の気概を持ち、夢と感動を育める学校づくりを目指していきます。

